

2 富山県における出現期のカマドについて

A はじめに

五社遺跡では5世紀中頃に位置づけられる竪穴建物が4棟検出されている。うち3棟ではカマドが確認されており、富山県においては最古例にあたる。北陸地方は古墳時代のカマドについては類例に乏しく、6世紀後半～7世紀初頭頃になって出現し、7世紀中頃以降に普及するという状況^{#1}である。富山県においても、カマドの出現は6世紀後半の上野遺跡で確認されたものが最古例であり、北陸の他地域と同様の在り方をするものと考えられてきた。しかし、五社遺跡では3棟の竪穴建物でカマドが確認され、県内及び北陸のカマド出現が約1世紀半も遡ることとなった。そこで、県内のカマドの変遷を追うと共に、五社遺跡のカマドの持つ意義についてみていきたい。

B 用語

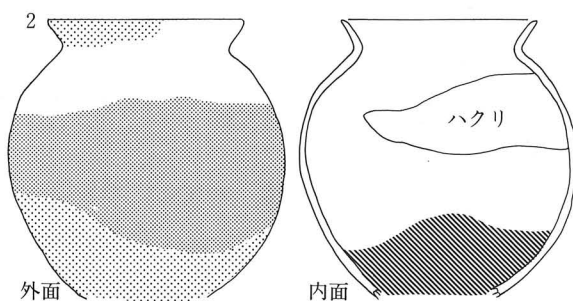
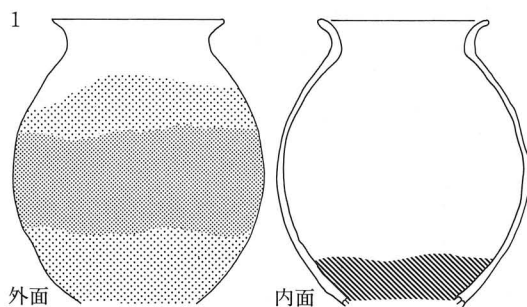
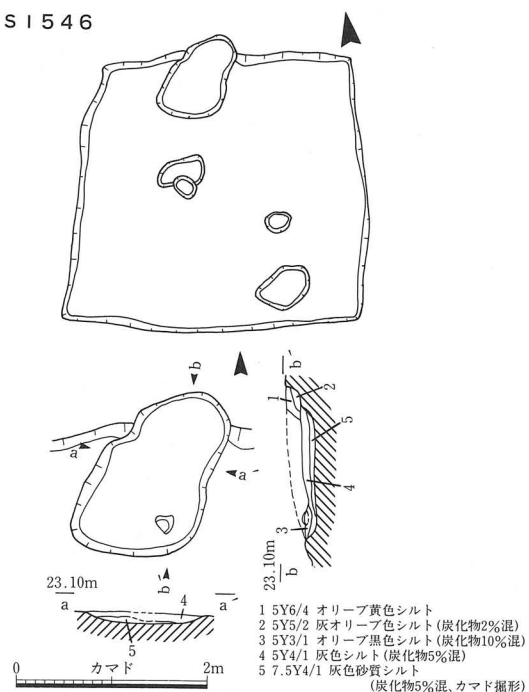
まず、「カマド」であるが、竈、かまど、カマドとまちまちに表記されているが、ここではカマドの表記を取るものとする(部分名称については第IV章1の注1を参照)。カマドはその構造・概念の上で、炉とは大きな差を持ち^{#2}、けっして「発展した炉」の延長上には考えられない施設である。ここでのカマドは、燃焼部(火処)を粘土などの構築材で覆い、焚口部と掛口部を作り出したもので、屋外に煙を導き出す煙道を持つ。空気の供給をコントロールできる加熱施設としての作り付けカマドを対象とする。

C 五社遺跡のカマド

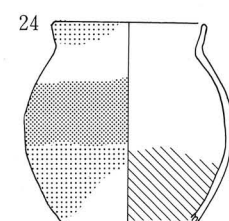
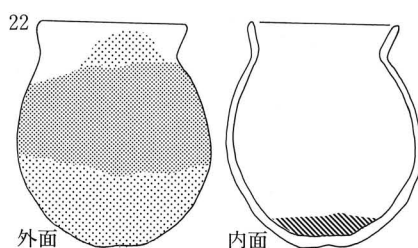
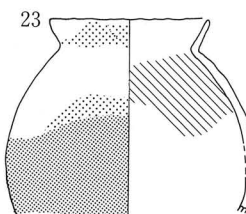
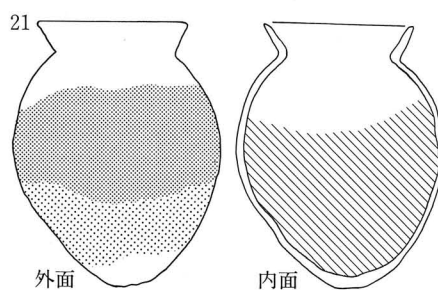
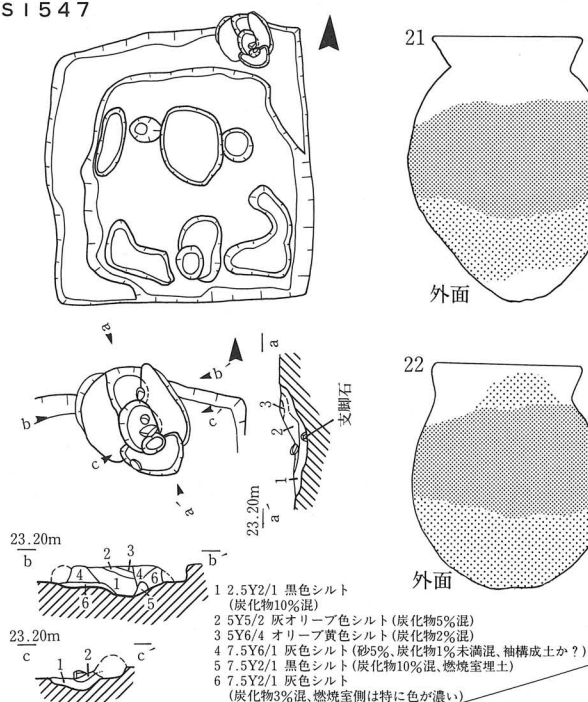
竪穴建物内の位置、規模、並びに出土土器の使用痕についてみていきたい。**SI546**のカマドは北壁中央の西寄りに位置し、壁に対して斜め左(西)に振れている。規模は160cm×120cmの楕円形で、浅い掘り込みを持つ。天井・袖・煙道・煙出口は確認されていないが、壁を25cmほど掘り込み、炭化物を多量に含む土が堆積していることからカマドの基部と考えている。同様な遺構が新潟県舟戸遺跡SI-1号住^{#3}にあり、報告では「張出し炉」とされ、「煙道を持つカマド成立直前の過渡期の形態」とされている。**SI546・舟戸遺跡SII**の例は、「類カマド^{#4}」とか「カマド状遺構^{#5}」と称されるものではなく、上部構造については不明ではあるが壁を掘り込んでいる点からは、未発達ながら煙道を意識したものと考えられ、カマドの概念の範疇で捉えられる施設であると考えている。**SI547**のカマドは北壁の東角に位置し、壁に対して斜め右(東)に振れており、ベッド状遺構の上に位置する。天井・煙出口は確認されていないが、袖は遺存状態が良く、カマドの全容が解る。規模は122cm×100cmで、燃焼部・焚出口は浅く掘り込まれ、壁を斜めに20cm掘り込んでいる。カマドの焚口幅は40cm、燃焼部幅30cm、焚口から奥壁までの長さ(奥行)90cmを測り、支脚石は焚口から32cmの位置にある。また、**SI546・SI547**ではカマドの覆土から被熱していない高杯が出土しており、カマド祭祀を行っていた可能性も考えられる。**SI644**のカマドは南壁東角に位置し、壁に対して斜め左(東)に振れている。規模は88cm×52cmで、他の2基とは異なり、壁を掘り込まずに接するだけである。天井・袖は確認されていないが、覆土の第2層は袖土の可能性もある。奥壁から40cmのあたりから一段深く掘り込まれており、焚出口と考えられる。また、奥壁と接する位置に粘土の小ピットがあり、性格は不明だが煙出口の可能性も考えられる。

3基のカマドはいずれも、竪穴建物の掘形に炭混じりの灰褐色シルトを貼って貼床とし、その上からもう一度掘り込んで土を貼りカマド基部としている。カマドの上部は更に上に作られることになる。このように、五社遺跡のカマドは二重構造を取っている。このような例は埼玉県下田・諏訪遺跡等で確認されており、除湿または亀裂防止効果の為と考えられている^{#6}。また、初現期のカマドは炉と併設

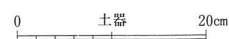
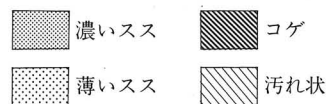
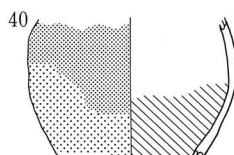
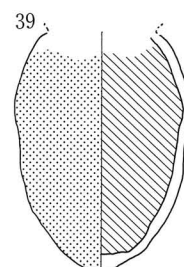
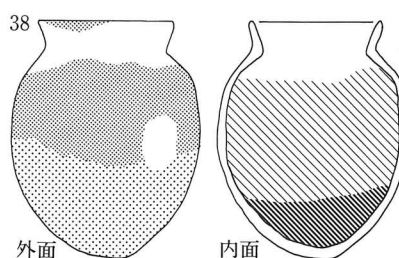
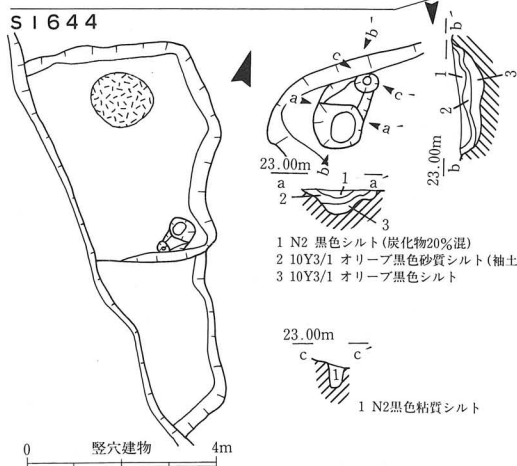
S1546



S1547



S1644



第197図 五社遺跡のカマドと土器使用痕

される例が多くみられるという指摘^{#7}があり、五社遺跡の場合はカマドを持つ竪穴建物の全てで地床炉が確認されている。

次に、土器の使用痕であるが、外山氏^{#8}によるとカマド使用の土器にみられる使用痕は、1, 肩部以下(口縁部から6 cm～7 cm下)に一線を画する様に、底部にかけて煤が付着する、2, 胴部の煤が無い部分や頸部にカマド材の粘土が付着する、3, 内面は外面の加熱痕跡と対応し、煤付着部分よりも僅かに下がった辺りからヨゴレが付着する、4, 焦げつきは炉使用の土器に比べて少ない、5, 内面に煤の付着はみられない等の特徴を持つ。五社遺跡のカマドを持つ竪穴建物出土の甕の場合、1・3・4・5が該当しており、カマドに使用された土器であると考えられる^{#9}。外面は肩部以下に煤の付着が認められ、肩から胴部中位にかけては帯状に濃い煤(タール状)がみられるが、口縁部及び内面には煤の付着は認められない。口縁部には部分的に薄い煤の付着がみられる所もあるが、口縁全周に巡るものはない。内面の焦げは底部付近にみられる。ヨゴレは判断が曖昧な部分もあるが、外面の煤ラインとほぼ対応している。しかしながら、出土状況からは炉に接するように出土した甕もあり、完全にカマドのみの使用とは限定できない面もある。2については、粘土の付着はいずれの土器にも認められない。このことは、五社遺跡のカマドが、甕を掛口に粘土等で固定する、いわゆる「はめごろし」の形態を取らないことを示していると考えられる。また、外山氏が観察の対象とした土器は群馬県のものであり、「二つ掛け横並び」の構造をとるカマドが主流を占めていることを考えると、五社遺跡のカマドは別の構造^{#10}を持つものであると考えられる。別の構造というのは、SI547ではほぼ中央に支脚と思われる石があり、「一つ掛け」のカマドと推測できる。先の関東(東日本)のカマドが「二つ掛け横並び」で甕と掛口を粘土で固定するものが主流であるのに対し、西日本のカマドは「一つ掛け」が主流となり、東日本と比較して袖や掛口部等を薄く造る。富山県はその境界線上に位置することが指摘^{#11}されており、これらのことから、五社遺跡の例は西日本的な薄く造るカマドであると考えたい。

D 出現期のカマド

次に出現期のカマドについてみていきたい。全国的には初現期のカマドは、福岡県西新町遺跡^{#12}・大阪府四ツ池遺跡^{#13}・滋賀県西ノ辻遺跡^{#14}・三重県勝田遺跡^{#15}等で確認されており、いずれも3～4世紀代に位置づけられている。西新町遺跡のSC-31号住は布留式併行期(3世紀末～4世紀初頭)の竪穴建物で、北壁中央部に焼土が確認され、煙道は認められていないがU字状に側壁を残すもので、初現期のカマドと考えられている。同様な遺構は四ツ池遺跡SA01住居址でも確認されており、時期は庄内式期末である。カマドの出現は、九州南部・山陰・北陸・東北を除く地域では、5世紀代には確実に確認されるようになり(第198図)、本格的な受容と普及は5世紀後半以降ということになる。出現期のカマドを持つ竪穴建物には須恵器が伴う例が多いことから、カマドの採用と須恵器の導入とが密接な関係を持つことが指摘されている^{#16}。

E 北陸の出現期のカマド

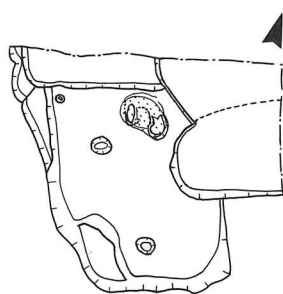
一方、北陸においてのカマドの出現は他地域に比べて遅く、6世紀代になってからであるが、北陸の中でも、新潟と石川・福井ではその在り方に違いがある。新潟では5世紀後半に舟戸遺跡の例があり、6世紀前半以降には普及する。カマドの出現・普及の時期は、隣接する信州・北関東・東南北部地域と比較すると若干遅れるが、北陸地方よりは早いことが指摘^{#17}されている。このことから、新潟でのカマドの導入は東日本の影響の下に行われたものと考えられる。また、カマドの構造上の面からは、一之口遺跡SI112号住^{#18}等で「二つ掛け横並び」の構造をとるカマドが確認されており、東日本的な在り方をしている。

2 富山県における出現期のカマドについて

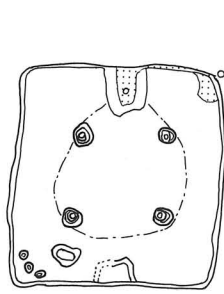
地域	県名	遺跡数	備考	地域	県名	遺跡数	備考
東北	北海道	—	7 C後半～	近畿	滋賀	11	4 C前のカマドあり
	青森	—	7 C前半～		大阪	19	3～4 Cのカマドあり
	秋田	—	7 C後半～		京都	13	
	岩手	—	6 C前半～		奈良	8	
	山形	—	6 C前半～		和歌山	10	
	宮城	6			兵庫	9	
	福島	3		四国	徳島	3	
北陸	新潟	1			香川	1	
	富山	1			愛媛	5	
	石川	—	6 C後半～		高知	—	6 C前半～
	福井	—	6 C前半～	中国	岡山	6	
関東	栃木	2			鳥取	—	7～8 C?
	群馬	12			広島	—	6 C前半～
	茨城	19			島根	—	6 C末～
	埼玉	64			山口	7	
	千葉	19		九州	福岡	15	3～4 Cのカマドあり
	東京	2			佐賀	8	
	神奈川	6			長崎	5	
中部	山梨	3			大分	3	
	長野	4			熊本	—	6 C前半～
	岐阜	3			宮崎	—	6 C後半～
東海	静岡	5			鹿児島	—	
	愛知	3			沖縄	—	
	三重	16	4 C前のカマドあり				

第29表 5世紀代のカマド数一覧（～5世紀末）

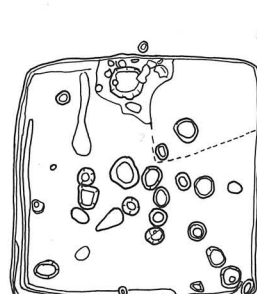
※『古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会1992をもとに作成。



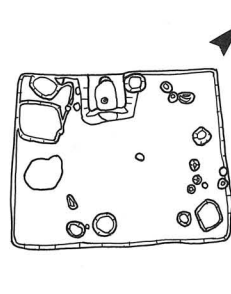
福岡県福岡市
西新町遺跡SC-31(4C前)



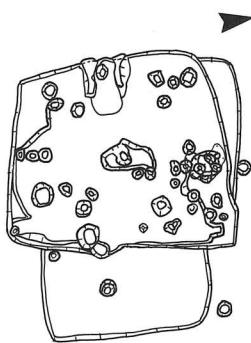
滋賀県甲賀郡能登川町
西ノ辻遺跡(4C前)



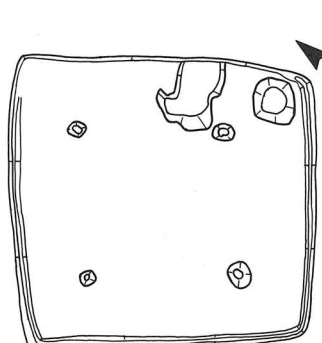
大阪府堺市
四ツ池遺跡SA01住(~4C中)



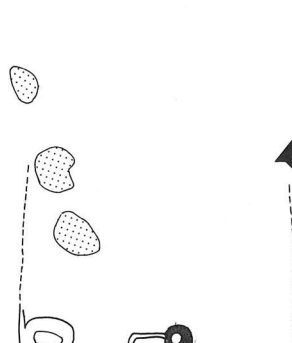
福岡県浮羽郡吉井町
塚堂遺跡B地区3号住(5C前)



福岡県浮羽郡吉井町
塚堂遺跡B地区1・4号住(5C前)



埼玉県本庄市
諏訪遺跡32号住(5C中～後)

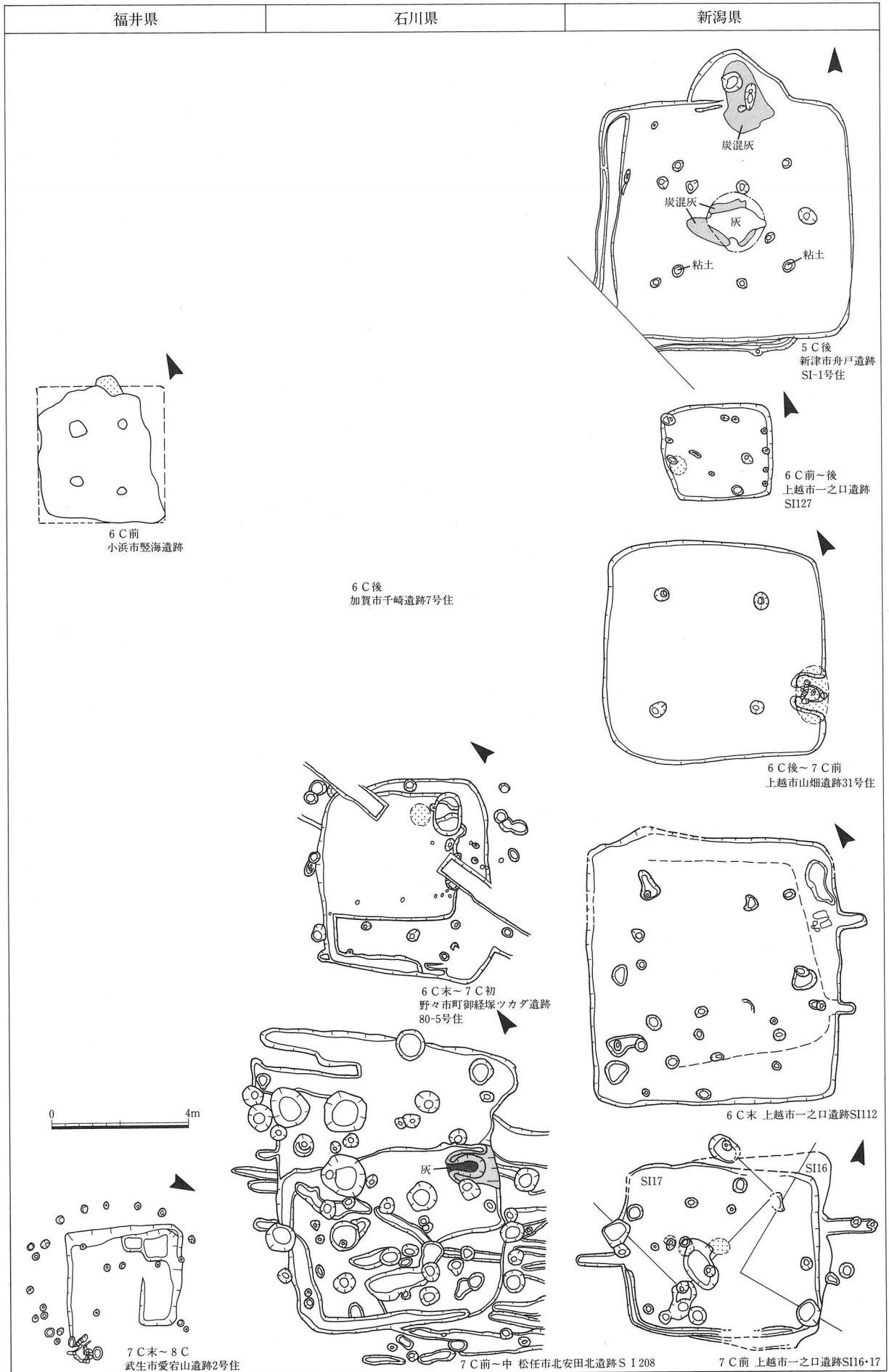


埼玉県行田市
武良内遺跡1号住(5C中～後)

2. 出現期のカマド

第198図 出現期のカマド 1. 5世紀代のカマド 2. 出現期のカマド

0 4m



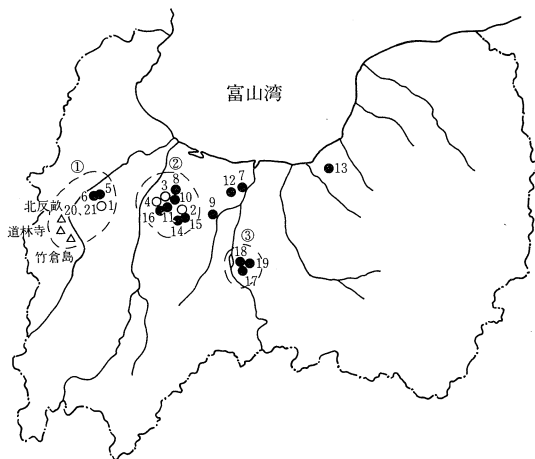
第199図 北陸地方のカマド

これに対し、石川・福井では、カマドが出現するのは6世紀になってからで、福井では堅海遺跡¹⁹で6世紀前半、石川では千崎遺跡²⁰で6世紀後半が初現とされ、以後7世紀になって普及する。6世紀後半の石川県念仏林南遺跡²¹で確認されたカマドは、明確な煙道を持たず、火処を粘土で覆っただけの簡易な「へつつい」的なカマドと予測され、西日本的な構造を持つと考えられている。

一方、いわゆる作り付けのカマドに対して、移動可能な置竈は確認例は少ないが5世紀末頃からみられる。同様に作り付けのカマド以前に置竈がみられる地域として、山陰地方（島根・鳥取）が挙げられる²²。島根では置竈が5世紀後半に出現するのに対し、カマドは6世紀末であり、鳥取では置竈はやはり5世紀後半に出現するが、カマドの方は未確認である。このように、山陰地方は弥生時代から奈良時代まで炉が作り続けられる特異な地域で、カマドとは異なる炊事形態を持っていたと考えられる。弥生時代から古墳時代の北陸地方では、土器及び墓制等の面で山陰地方の影響を強く受けていることが知られており、カマドの在り方においてもその影響を受けているものと思われる。

F 富山県におけるカマドの変遷

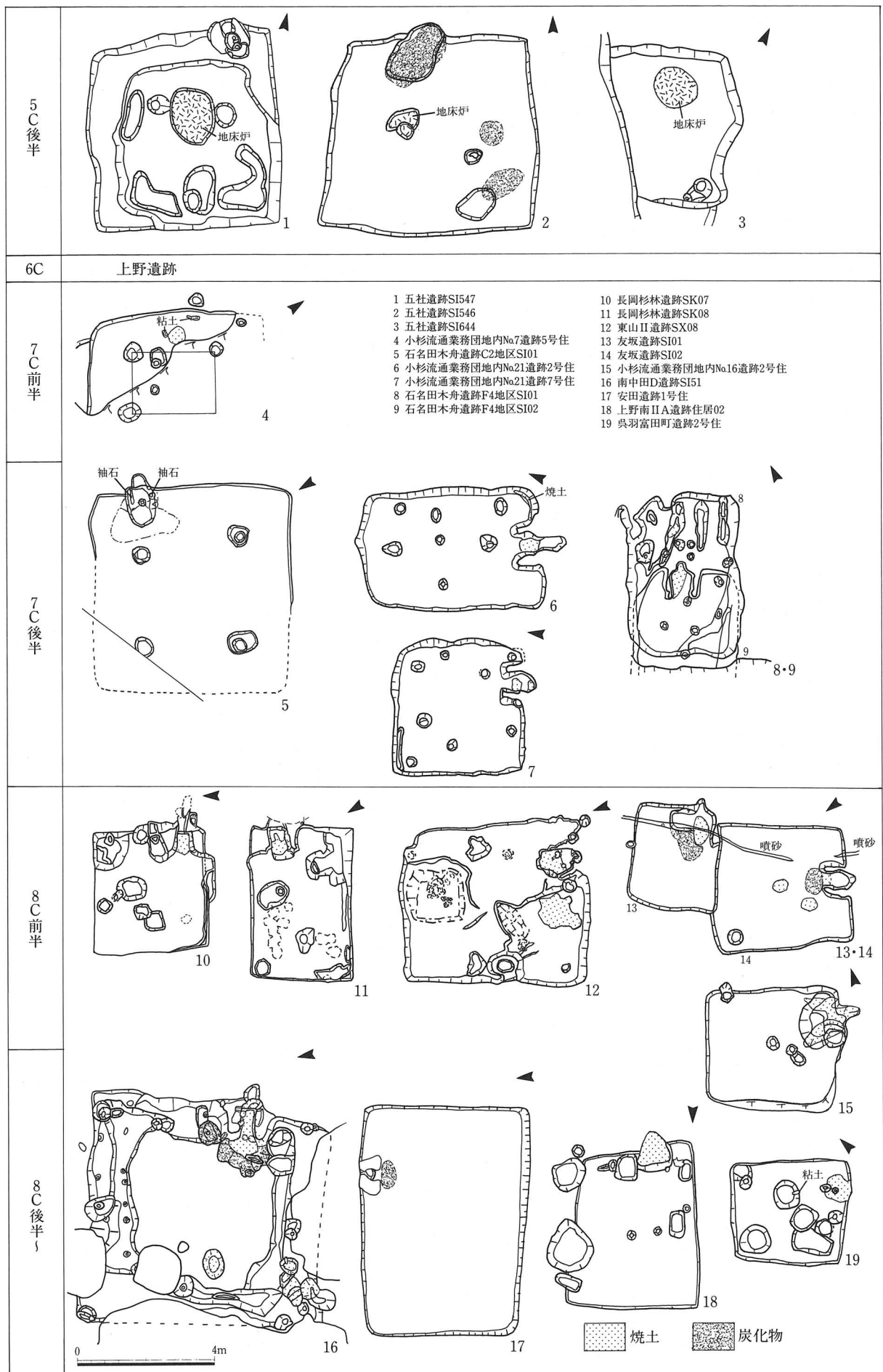
富山県においては、今回の五社遺跡（5世紀中頃）が初現となる。6世紀前半の確認例はなく、約1世紀半あいて6世紀後半に上野遺跡に出現するが、記録写真集による資料しかなく詳細については不明である。7世紀前半には流通業務団地内遺跡群（以下、流団と略す）No.7遺跡5号住で地床炉とその周囲に白色砂質土を方形に固めた土魂が検出されており、土魂が火熱を受けていること、及び土製支脚が出土していることからカマドの可能性が強いとされている遺構である。この段階までは、カマドは単発的で継続性がみられず、県内で本格的に導入され出すのは、7世紀後半以降になってからと思われる。7世紀後半には流団No.21遺跡（小杉丸山遺跡）・石名田木舟遺跡C2・F4地区で確認されている。流団No.21遺跡では24棟の竪穴建物が確認されているが、完掘されたものは少なく、そのうち2棟でカマドが確認されている。いずれも南壁に位置し、両袖・煙道を有している。石名田木舟遺跡C2地区では7世紀後半に属す竪穴建物が2棟確認され、いずれもカマドを持つ。1号住では、袖部に切石が使用され、支脚石に甕が置かれた状態で出土している。8世紀前半になると長岡杉林遺跡・東山II遺跡・友坂遺跡・流団No.16・18遺跡で確認されており、長岡杉林遺跡等の県中央部の地域でもカマドが導入され出す。8世紀後半には上野南遺跡・流団No.20遺跡・呉羽富田町遺跡の他、神通川の東側の地域でも南中田D遺跡・吉倉A・



第200図 遺跡位置図

時 期	No.	遺 跡 名	竪穴数	カマド数	文 献
5 C 中	1	五社	4	3	8
6 C 前					
6 C 後	2	上野	1 ~	1 ~	16
7 C 前	3	流団No.7	23	1	13,15
7 C 後	4	流団No.21	24	2	14,15
	5	石名田木舟C地区	2	2	8
	6	石名田木舟F4地区	1	1	9
8 C 前	7	長岡杉林	2	2	2
	8	東山II	1	1	17
	9	友坂	3	3	6
	10	流団No.16	1	1	12,14,15
	11	流団No.18	6	3	12,13,15
8 C 後	12	呉羽富田町	4	2	5
	13	安田	3	3	7
	14	上野南I	6	3	11
	15	上野南II A	2	1	11
	16	流団No.20	3	2	10,15
	17	南中田D	61	54	3
	18	吉倉A	4	4	4
	19	吉倉B	48	37	1,4
9C前	20	石名田木舟F2地区	3	3	9
	21	石名田木舟F4地区	1	1	9

第30表 県内のカマド確認遺跡一覧



第201図 富山県のカマドの変遷

B遺跡等の県総合運動公園内遺跡群や滑川市安田遺跡で確認例があり、本格的な普及時期となるが、県最東部の地域ではカマドの確認例が無く不明な点が多い。南中田D遺跡は存続年代が8世紀後半から10世紀前葉にかけての集落で、61棟の竪穴建物が確認されており、うち54棟がカマドを持つ。カマドの袖部や天井に芯材として石が使用されているものと、粘土のみによるものと2タイプが認められる。また、カマドの床面積に対する占有比率から、竪穴建物自体の規模が縮小する傾向にあっても、カマドの規模は時期の新旧にかかわらず変化しないことが指摘されている^{註23}。

カマドの構造面では、燃烧部及び焚出口等を浅く掘り窪めることや、煙道の長さ等に時期による大きな違いはみられず、出現期からほぼ完成された状態でカマドが導入されていたものと考えられる。また、カマドが作られている方位であるが、南及び西向きのもが多く、次いで北向きである。カマド位置がコーナー付近にあるものは、カマドの占める比率の高い方の壁に作られているものとした。南中田D遺跡では、ほとんどのカマドが東及び南向きで強い規則性を持っていた時期から、北向きが急増し、以降規則性が崩れていくという現象がみられるが、他の遺跡ではばらばらであり、規則性は認められない。近接する遺跡でもばらつきがみられることから、集落（竪穴建物）の立地環境や風向きによるものと思われ、規則性は見出せない。東向きを取るものは、県内では呉羽富田町・南中田D・吉倉B遺跡の3遺跡のみと少ない。南中田Dと吉倉Bとは隣接する遺跡であり、地理的（地形的）な条件によるものと考えられる。

県内でカマドが確認された遺跡は（第200図）、①五社・石名田木舟遺跡による県西部の地域、②流団・上野遺跡を中心とする小杉町・大門町にまたがる射水丘陵地域、③運動公園に関連する神通川右岸の地域大きく3地域に分かれる。地域ごとにみていくと、②の地域は、6世紀後半の上野遺跡でカマドが出現して以降、8世紀後半まで継続してみられ、県内ではカマドの定着が早い地域である。射水丘陵は県のほぼ中央に位置し、須恵器・鉄などの生産遺跡が集中しており、須恵器の生産は7世紀第1四半期から開始されている。流団・上野・上野南遺跡は須恵器窯・製鉄炉を含む生産施設と、その工人集落からなる。このことは、カマドの導入と、須恵器（生産）の導入及び工人集団との間に密接な関係があることを示唆しているものと考えられる。③の地域は、カマドの出現は遅く、8世紀後半以降になってからであり、県内のカマド普及のピーク時にあたる。南中田・吉倉等の集落遺跡は神通川と熊野川に挟まれた扇状地上に位置する。①の地域は県西部の小矢部川右岸地域である。五社遺跡では5世紀中頃のカマドが確認され、県内でも最古にあたるが、その後に継続はしない。五社遺跡周辺のほぼ同時期と思われる遺跡からは陶器編年のTK216・208等の須恵器が出土しており、県内でも須恵器導入の早い地域である。また、富山では置竈は確認されておらず、作り付けのカマドに先行して置竈のみられる石川（能登に多い）と対照的である。

G まとめ

これまで、北陸並びに富山県内のカマドの出現・普及の状況についてみてきた。ここでは、県内のカマドの導入から普及までの変遷と、五社遺跡の位置づけについてまとめてみたい。

まず、構造的には、短いながら壁を掘り込んで煙道の立ち上がりとする点や、燃烧部・焚口部を浅く掘り窪める点等はカマド普及期の南中田D遺跡も、出現期の五社遺跡も変化は認められない。このことは、カマドが一地方で発展発生（自然発生）したものではなく、「完成された形」でおそらくは畿内から導入されたことを示していると考えられる。

次に、カマドの導入についてであるが、県内では①→②→③の順にカマドの出現時期が遅くなり、西から東へ伝播していった状況を示していると考えられる。出現期に関わるものでは、①・②の2つ

の地域がある。両地域ともに4～6世紀にかけて首長墓や群集墳が築かれた地域である。①の地域は道林寺・北反畝遺跡等の須恵器を出土する遺跡（集落）がみられ、県内でも須恵器導入の早い地域であり、須恵器やそれに伴う技術を受け入れる社会的背景があったと思われる。②の地域は7世紀初頭から須恵器生産が行われており、カマドは須恵器生産に関わる工人の集落で用いられたものである。こうしてみると、富山のカマドの導入は須恵器の導入とほぼ同時期であり、密接な関わりの下に行われたといえる。カマドの導入には2つの段階がみられる。1段階は、「モノ」としてのカマドのみが導入されたもので、五社遺跡にあたる。五社遺跡からは須恵器は出土していないが、須恵器を導入する環境下にあったと思われる。しかし、遺跡自体が一時期のみの短期滞在で終わってしまうこともあり、周辺に継続（定着）しない。2段階は、「技術・人」を介してカマドの導入がなされたもので、須恵器生産が他地域に比べ卓越する射水丘陵²⁴で始まる。須恵器等の生産工人の集落で用いられ、周辺地域へも継続（定着）していく。このことから、富山におけるカマドの本格的な導入は2段階（6世紀後半～7世紀初頭）からと考えられ、富山で須恵器生産が開始される時期と連動しており、同時に導入されたものと考えられる。以上、大雑把な推論を重ねてきたが、カマドのデータ化や周辺地域との比較・検討など今後の課題としていきたい。

（三島道子）

注1・7 田嶋明人 1992「北陸地方の概要」『古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会

注2・5 森原明廣 1990「関東地方におけるカマド初現をめぐって」『研究紀要』6山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

注3 川上貞雄 1995『舟戸遺跡』新津市教育委員会

注4 石野博信 1975「考古学からみた古代日本の住居」『日本古代文化の探求 家』社会思想社

合田幸美 1988「出現期の竈」『網干善教先生華甲記念考古学論集』同記念会

注6 柿沼幹夫 1979「V住居跡について」『下田・諏訪』上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告III埼玉県教育委員会

注8 外山政子 1990「羽田倉遺跡の煮沸具の観察から」『長根羽田倉遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

外山政子 1991「三ツ寺II遺跡のカマドと煮沸」『三ツ寺II遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

注9 藤田氏は西日本の土器を対象に 煮沸具の煤・コゲの観察から炉型・カマド型を分類し、使用施設を特定している。五社の例は、藤田氏がカマド型に分類されたパターンに該当すると考えられる。藤田至希子 1986「古墳時代前期の煮沸具形態について」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所

注10 外山政子 1992「炉かカマドか-もう一つのカマド構造について」『研究紀要』10群馬県埋蔵文化財調査事業団

注11 愛知県東部から飛騨山脈を通り、富山県に通じるラインを境界線として、東西で竈構造が異なる。北陸地方は奈良時代の例であるが、一つ掛けで西日本的な構造を持っている。杉井 健 1993「竈の地域性とその背景」『考古学雑誌』第40巻1号

注12 松村道博 1989『西新町遺跡』福岡市教育委員会

注13 樋口吉文他 1992「大阪府」『古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会

注14 杉浦隆支他 1992「滋賀県」『古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会

注15 倉田直純他 1988『勝田遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会

注16 須恵器とカマド導入とに密接な関係があることを指摘した論文は多々ある。林博通 1973「カマド出現に関する二・三の問題」『水と土の考古学』小江先生還暦記念論集刊行会など

注17 春日真美 1996「越後における5～8世紀の竪穴建物」『新潟考古学談話会会報』第16号

注18 鈴木俊成他 1994「一之口遺跡東地区」上越市春日・木田地区発掘調査報告書IV 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団

注19 入江文敏他 1992「福井県」『古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会

注20 石川県教育委員会 1971『千崎遺跡』

注21 望月精司他 1995『念仏林南遺跡II』小松市教育委員会

注22 亀田修一 1992「中国・四国地方のカマド」『古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会

注23 河西健二他 1991『南中田D遺跡発掘調査報告書』富山県埋蔵文化財センター

注24 上野 章 1993「富山県における生産開始期の須恵器窯跡について」『北陸古代土器研究』第3号

引用・参考文献

※本文中に引用した遺構実測図については、一部加除筆させていただいた。

岩松 保 1987「カマドの有る住居と無い住居」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 京都府埋蔵文

化財調査研究センター

- 大川 清 1955「カマド小考」『落合』早稲田大学考古学研究室
- 大場磐雄 1955「土師式住居址からみた諸問題」『平出』平出遺跡調査会
- 栗原文蔵他 1977『鴻池・武良内・高畑』埼玉県遺跡発掘調査報告書第11集 埼玉県教育委員会
- 木田 清 1990「5世紀～8世紀における石川県内の竪穴式住居 掘立柱建物について」『松任市源波遺跡』松任市教育委員会
- 小島幸雄他 1979「山畑遺跡」『岩木地区遺跡群発掘調査報告』上越市教育委員会
- 駒見和夫 1985「古代における炉とカマド」『信濃』第36巻4号
- 笹森紀己子 1982「かまど出現の背景」『古代』第72号
- 田中茂良 1993「竈構造に関しての一考察」『市原市文化財センター研究紀要』II 市原市文化財センター
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 谷 旬 1982「古代東国のカマド」『研究紀要』7 千葉県文化財センター
- 富田好久 1985「古代に於ける炉とカマドの変遷」『末永先生米寿記念献呈論文集』同記念会
- 中島俊一 1982『松任市上二口遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 藤原秀樹 1986『愛宕山遺跡群 I』武生市教育委員会
- 前田清彦 1990『松任市北安田北遺跡II』松任市教育委員会
- 馬田弘稔他 1983『塚堂遺跡 I』福岡県教育委員会
- 宮崎幹也 1988「竪穴住居に付随するカマドの検討-滋賀県下の検出例から」『紀要』第1号 滋賀県文化財保護協会
- 横川好富 1987「竈の出現とその背景」『埼玉の考古学』柳田敏司先生還暦記念論文集 同刊行委員会
- 吉田 淳 1984『御経塚ツカダ遺跡発掘調査報告書 I』野々市町教育委員会

富山県内のカマド確認遺跡・文献 ※No.は第30表の文献番号と対応する。

[富山市]

- 1：狩野 陸他 1994『吉倉B遺跡』富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(4) 富山県埋蔵文化財センター
- 2：久々忠義他 1987『長岡杉林遺跡』富山市教育委員会
- 3：斉藤 隆他 1991『南中田D遺跡発掘調査報告書』富山県埋蔵文化財センター
- 4：酒井重洋他 1993『任海遺跡・吉倉A遺跡・吉倉B遺跡』富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(3) 富山県埋蔵文化財センター
- 5：藤田富士夫 1978『富山市呉羽富田町遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

[婦中町]

- 6：岡本淳一郎他 1993『友坂遺跡発掘調査報告II』婦中町教育委員会

[滑川市]

- 7：宮本幸雄 1982『安田・寺町遺跡発掘調査報告書』滑川市教育委員会

[小矢部市・福岡町]

- 8：河西健二他 1994『埋蔵文化財年報(5)』財団法人富山県文化振興財団
- 9：島田美佐子他 1995『埋蔵文化財年報(6)』財団法人富山県文化振興財団

[小杉町・大門町]

- 10：池野正男 1979『流通業務団地No.20遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 11：池野正男 1991『上野南遺跡群発掘調査報告』小杉町教育委員会
- 12：上野 章 1980『小杉流通業務団地内遺跡群第2次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 13：上野 章 1982『小杉流通業務団地内遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 14：上野 章 1984『小杉流通業務団地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 15：上野 章 1986『小杉流通業務団地内遺跡群第8次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 16：橋本 正 1974『小杉町上野遺跡-記録写真編』富山県教育委員会
- 17：山本正敏他 1983『県民公園太閤山ランド内遺跡群調査報告(2)』富山県教育委員会